

第1分科会  
子育て、教育を語る  
乳幼児期から思春期まで

助言者 渡辺真由美 (元小学校教員)  
          甲田 由夏 (新座市学童保育の会)  
司 会 甲田 由夏  
記 録 本谷いずみ (市職労)  
          渡辺真由美 (元教員)



参加者 23名

## 1 自己紹介を兼ねて、今の子育てについての発言から

- ・中学の時、学校に行かなかったわが子、どうしたらよかったのか？
- ・祖母と子育ての方向性が食い違い困っている。
- ・子どもたちは疲れている。学習のスピードが速いし詰め込み。放課後が保障されていない。
- ・学校が子どもたちのストレスの場になっている。
- ・今、わが子は小さいが将来のために話を聞きたい。
- ・学童保育が民間になると聞いた。ショックを受けている。今、自治体は教育から手を引いている。志木で教員をしていた、少人数学級の大切さを訴えたい。
- ・わが子が中学時代、不登校だった。パニック障害もあった。
- ・先生たちが心身ともに余裕がない（元教員）
- ・教科書が厚くなった。教える内容が多い。その上、考えて話し合う授業よりもテスト重視の傾向の授業が増えた。学級の児童数も1～2年は35名、3～6年は40名（新座市は国基準のまま）である。（元教員）
- ・ココフレンドは今、新座全市でボランティアが運営している。学童はあと2年で、一人あたりの面積の問題で待機児童が出てくる。（学童）

## 2 上記の発言を受けて話し合い

### ○家庭での子育てをめぐる〈子⇄親⇄祖父母との関係〉問題

- ・三世帯同居している。母としては、小学生の時は楽しい体験をたくさんしてほしいと思っているが、祖母は学習に力点を置いた言動で接している。そこで、わが子なので口出ししないで欲しいと話した。

- ・嫁の立場で言いづらいので、息子（夫）から言ってもらおうと良いのではないか。
- ・息子が不登校の時、母（祖母）から、職場に「どうしたらいいのか？」と連絡があつたりして困ったことがあった。
- ・祖父、祖母が子育て学級などに出られるといい。
- ・早期教育が煽られているのでその影響がある。
- ・祖父母世代も社会参加をすると良いのではないか。
- ・父親の出番です。父親が家族の中で子育てをめぐる話し合いに入って発言してほしい。

## ○学校、学童、保育園をめぐる問題

- ・子どもと向き合いたいのに事務仕事が多い。管理職は教育委員会からくる要請にビクビクしている。
- ・道徳が教科化されたので、各教科の年間計画作り（道徳を全教科の指導内容に関係づけて作成しなければならないので手間がかかる）に時間がかかる。
- ・保護者と向き合う場がなくなった。〈家庭訪問がない、懇談会が形式的になった。学校の電話も6時以降は受けない〉
- ・先生はいつも忙しそう。
- ・保護者は、クレームを教育委員会に持って行こうとする傾向がある。
- ・保護者が学級の援助に教室に入ったが、ある保護者から「〇〇ちゃんなんか、なんでこの教室にいるの？」という声が出た。学級の支援は、保護者でなく教員をと感じた。
- ・教員は評価されている。その評価はランク付けされて給料に反映される。
- ・保育園も事務処理が増えた。親のクレームもある。園長がスキルやパワーでがんばっている。一人ひとりの保育士が力をつけていく必要がある。
- ・校長の権限が強くなっているが、校長も「どうしたら、子どもが

すこやかに伸びるか」の基準で学校づくりをしていくと良いと思う。

- ・教員一人ひとりも上記の視点で、教育を主体的に考え判断していくと良いと思う。
- ・わが子は、特別良い子でも悪い子でもない普通の子である。担任から見てもらえてないと思っていたが、担任が多忙だからと分かった。
- ・通知票の評価に「態度、意欲」の欄があるが、態度や意欲を評価するのはどうかと思う。
- ・志木市の24名学級がなくなるという。理由は「教員の資質がない、4月の段階ではクラスの人数が決まらない、TTで入れればいい」と市長は言う。子どもの成長を考えてほしい。
- ・無言清掃、朝何分に席に座っていないと遅刻、学力テストで教員評価(大阪)、異論を言わせないための人事評価等々、学校はそれが巢食っている。子どものストレスになっている。まさに学校はストレスを溜めさせる所になっている。
- ・学校や保育園、学童保育所が子どもを豊かに育てる本質的な環境(場)ではない方向にいつている。行政に訴えていく必要がある。
- ・保護者がクラス支援にいく時間は、家庭科でミシンの使い方、生活科の遊びなどの手伝いはいいと思うが、学級が困難なクラスに入るのは疑問である。
- ・宿題を家庭でフォローできないところもある。家庭も忙しく大変な状況にある。宿題が多すぎると感じる。
- ・学童に通う子が増えた。宿題、遊び、ふれあい等で学童の環境は大切である。
- ・不登校の時、学校に電話したら、教頭先生が迎えてくれ「お母さん大丈夫だよ。学校でフォローします」って言ってくれた。その一言で学校が信頼できた体験がある。

★参加者は、地域のお母さん、地域の方、新婦人、小学校のPTAの会長、ココフレンドの担当者、市職労、学童保育の指導員、市

内の教員、市外の教員、元教員でした。

★今回の報告は自己紹介、話し合い共に箇条書きの報告にしました。

★「子育て・教育を語る」では、家庭や保育園、学童保育、学校、地域で子どもたちが置かれている現状を話し合いました。それぞれの場に関わっている私たち大人は、「子どもたちが健やかに伸びるように」の考え思いから行動しています。しかし、そこでは、常に為政者や管理者、また体制側に沿って子育てしなければという思いの人たちとぶつかり合いが生じます。短時間でしたが、このぶつかり合いの問題、疑問を出し合い話し合いをしました。この話し合いを通して以下のようなことが見えてきました。

- ①私たち大人は、それぞれの持ち場で子どもたちの思いを聞き取り、受けとめ、子どもたち自身が愛されている、自分が自分でいいんだ、と感じられるような場をつくる。
- ②子どもたちが仲間たちと関係を豊かに切り結び広げていける場にする。
- ③その中で、子どもたち一人ひとりが個性を伸ばすことができる場にする。

次回も子どもたちを取り巻く状況を語り合い、子どもたちの存在が希望になるような地域を目指して行動して行きましょう。

参加ありがとうございました。

(文責・元教員 渡辺真由美)

